

サビエル生誕五百年



巡礼の道

188

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

笑顔がいちばん



妻が書いた絵手紙

デイサービスに通う妻がそばで絵手紙を描いている。持ち帰る作品を見ると絵に添えた言葉がいい。

「あなたの役に立ちたい」「感謝」「光に向かつてはじめてひらいた」「ふぞろいでも離れられない」「日々挑戦」「ルージュの口紅をつけて出掛けましょう」などだ。

先日は「笑顔がいちばん」と書いてあった。絵に直接関係がなくとも、何となく言葉が伝わってくる。

褒めると、いい言葉をさがそうと新聞の切り抜きを始めた。やはり人は褒めなくては

けない。

笑顔といえばアンコール遺跡に「東洋のモナリザ」と呼ばれる女神像がある。

アンコール・トムの四面仏のほほえみのことかと思っていいたら、トムから三十キ余り離れたベンテアイスレイにあった。

バスで一時間近くもかけてわざわざ行ったのだが、遺跡保存のためにロープが張られていて近寄れない。写真でも撮って見学ルートに展示くらいすればいいのにも思ったが、遠くから見る限り、その大騒ぎするほどのものでもない。



東洋のモナリザとよばれる女神像

この像を有名にしたのは作家アンドレ・マローが盗み出そうとして逮捕され、そのてん末を「王道」という作品に書いたからだ。

アンコール・トムの四面観音菩薩と比べるとはるかに小さく一層余り。アンコール王朝の初期の遺跡で紀元九〇〇年代に作られたものらしい。

パンフレットを買って顔の表情を見るとほえんでいる。石仏にしろ、女神像にしろ確かに笑顔がいちばんである。

最近接客業の人たちは笑顔の訓練を受けるというが、たとえ

くり笑いであっても、ぶつきらぼうな対応よりはいい。

カンボジアの貧しい人たちを支援しているバタン・パン友の会の皆さんと支援先を訪ねた今回の旅、現地で弱い立場の人のために働くシスターの顔はみんないつも笑顔。やはり「笑顔がいちばん」である。

七十歳、高齢といわれる年齢になって、一日々々をホスピタリティ

イの心で生きようと思っているのだが、笑顔も大切なホスピタリティだ。

葉ボタンの絵に妻がどんな気持ちで「笑顔がいちばん」と書いたか知らないが、大勢の高齢者に囲まれながらリハビリに励み、そのありのままの現実を受け入れ、明るく前向きに生きるというメッセージのように思えた。
(元山口放送取締役ラジオ局長)



マザーテレサの会のシスター